

洋学文庫  
文庫8  
C 497



内外新報

第十一號



定價八角





内 外新報第十一號

慶應四年閏四月三日



○

一 粟橋岡と申田あふとも右河の兵固め川中へ叙せし  
官軍方お固め

一 利根川と申舟場とては忠の勢固め

一 日向川と申三里の石取引らば粟橋岡と叙せし切し  
いよし

一 粟橋岩とて根堀とては市中のとては是を去りて板  
官軍方より中誠いせ

v 57164

一日月十六日小山宿ありて戦事あり 官軍石橋宿より引退あり

一月十七日小山宿より手掛をふりて戦事あり本陣より西のき場人家やき

○

十九日夜越後方面の赤宿荒井と中宿に浪徒の兵隊凡そ七八百人をど志陳史が松本に并戦と中宿より西へ越え赤宿の先き半後宿に松本の兵二千人に出張板木宿ありと聞のき二千人をうりて西の先き尾州の人殺之に人斗死交すい跡傍の先米山禁より野園二ヶ所にお建の上し

○四日女四日宇津宮々の末状写

十九日宇津宮の大合戦あり市中八分通り焼をらふ女四日女不落城脱走方四千人計り城へのり入り日の丸の旗をよ 東照神君の旗殺すおしきむる安合戦又西度の脱走方勝利あり又四千人計り壬生へ掛合し余りいよし  
廿一日壬生石橋宿とのわつと安福の原より不あり合戦お始り  
廿二日壬生落城鉄炮玉美著打まておき右行の方へ引とりいよし

廿二日冥宿合戦既幸方勝利人殺数千人有之此一系  
おまより飛りおふり不中其勢ひ破れつのごとくこ中  
より産け

○平尾を里原奔れし事

近藤 勇

右の元来深谷のりあり初めを京形提督に攻め  
め後に戸又佐居は多し大久保大和と交戦し甲斐  
より徳川の内命を交へあざむく偽りとあへ  
および此後とい 然故下を徳川の命を偽りし  
ハ徳川の内命を交へあざむく偽りとあへ  
および此後とい 然故下を徳川の命を偽りし

身は飛殺るよといしまりしに仍く死刑よかともあひ  
泉首せしむる若あり

但し首役は洗ひいとあへく系たれさしとせよし  
廿五日豊ごろのことありと主人の必しよきとぬ

○大政官日誌の抄写

紀伊中納言

有馬中勢大輔

奥平大膳左衛門

小笠原左代丸

謀口誠く進

伊達作儀守

大熱督不日ノ 長府入城ニ由テ成付クハ因東法取  
締者奥羽等處ノノ平定ニ由リ以テ指揮ノ有クハ  
付テ出度東向也 仍付以事

但シ長府ノ上車板 大熱督自テ厚出以洋陣中ハ勿  
得途中為想ノ最前ニ由リ不覺悟ニ至ルルノ  
心付以事

右一紙

今般進ヲ 所親征 所出軍ニ於海軍 所覽之上買取  
附機ノ上ノ車板 擊與之東海乃自テ為向 思石工

以右を先般ありてあわく織法 官軍を抗し是く撃破  
しかるべしといふも未だ所黨被是屯在い多し最い  
由おせへいし付働し弟民狼狽辛苦くわど也 歎思長  
以糸 大熱督指揮くとい未あ又忠義を遂げ四海平定  
是安 宸繼以板 所抄付以事

三月

在系在酒藩くは

右番村在系く人殺者別身雛形ノ通リお洞へ為月廿六  
日占て下筆出いむ由以來増減何ん最ハ其時ノ其お遠

二 ねんいふ

三月廿四日

軍防局

別紙

覚

一 惣人数 何百人

銃隊

内 何百人

何方出兵

何百人

何方警備

殊 何百人 高州在東

一 何百人

役人

一 何百人

大砲

右在東の人數等如斯の由度以上

同日

竹催

○

今敵船敵を降くの外一切大敵は 降出のて大綱成り  
 けし其若目より直りいりて遂に人殺し其情罪を免し  
 けし其若目より別降くすあて其解限の程をわかれ免れ  
 くと下をて致し且 皇國之法を以て撫考修り以て矯激く不  
 仍にかよひ 邦憲を福を授け不念く免れ又お成り共と  
 由かろく伏せりお分へ在り内実り忠奮り出候むを  
 情状有る共ハ跡式再辱り其程に及じ取扱以て宛纏と

憂めいかり 不致相又當時存在わく禁烟又在落魄以多  
し飛いりのも有々いさく是又書文之類を以て寛宥し  
括るよ及有 所出法よい事

二月

内外新報

第廿五



內外新報

第十二號

定價八分



内外新報第十二號

慶應四年四月廿九日

○御宸翰寫

朕幼弱を以て倅に大統を依りて來りて以て事むる  
 對をし 列祖の事へ甘らんやと朝夕思惟し堪ざる  
 あり竊に考るに中葉朝政衰へより武家權を失はれ  
 し表に 朝廷を推さし實に敬しとて事を遠け位  
 の父母としり終る赤子の情を知る事能きか  
 未し遂に位兆の君たる由唯石のこゝに成果を  
 今且 朝廷の爲重なるに倍せし如く  
 如く霄壤の如

五十六  
しつゝる形勢より何と以て天下に覇をせんや今般  
朝廷一新の時、響り天下の位、一人も其不を以ざ  
る時、皆朕が寵ある、今日の事、朕自ら牙骨を勞し  
心志を苦しめ、艱難先より右、列祖の志を世に給ひし  
業を履き、治蹟を初め、その始め、天職を甘し、位  
此の君たる、お背かざる、爲し、往昔、列祖の業を親ら  
し、不屈の若く、自ら將とし、是を征し、給ひ  
朝廷の政、想より簡易より、如は、昔を承り、ざる、故、君は  
お教より、上下お愛し、徳、天下に給く、國威、海外に  
輝きし、あり、然る、近來、宇内、大に、兩帝、各國、四方、にお

雄飛するの時、又、獨り、我國の、と、世界の形勢、  
うとく、昭昭を、固より、一新の效を、計らむ、朕、位ら、九  
年の中、安んじ、一日の安きを、偷と、百年の憂を、忘る  
、とき、遂に、各國の、凌侮を、受け上る、列祖を、辱し  
め、甘り、下、位、此を、苦しめ、ん、多を、思ふ、故、朕、ある、  
百官、法、儀と、度く、お誓ひ、列祖の、清、偉業を、継述し  
一、才の、艱難、辛苦を、同ら、ん、親ら、四方を、經營し、汝、位、  
を、安んじ、遂に、萬里の、波濤を、開拓し、國威を、四方  
に、宣布し、天下を、安んじ、無の、安きを、置ん、多を、欲し、汝、位、  
四、來の、陋習を、改む、る、其の、と、朝廷の、事と、おし

神祇の危急を知らば朕一度皇を奉生を非常に驚き  
種々の齟齬を生し弟に紛伝とし朕が志を去さば  
らむるときは是朕をしる君たるを告げしむる  
のよあはば後々 列祖の天下を告げしむるあは  
位祀継ぐ朕が志を體使しお率ひて私見を去り公義  
と採り朕が業を助ぐ 神祇を保全し 列聖の神靈  
に對しせらしめん生帝の孝志あはむ

右

所宸翰の通唐く天下位祀の養生を 思食させ給  
ふはる法仁惠の 法教をよ付来くの者よむるを

敬承し甘く心に達せし故國家の爲に精く其方々  
を志す事

三月

總裁  
輔弼

誓文

- 一 唐く令儀を具し弟極て偏に決をべし
- 一 上下心を一にして盛に後論を終ふべし
- 一 官武一途庶民に玉を君其志を遂げ人んとしる倦さ  
らしめんを要れ
- 一 四末の醜習を破り天地の公たよ基く爲し

五十八

一智識を世界より求めたは、皇基を振起すべし  
我國未嘗有の變革を爲んとし朕を以て衆を先ん  
し天地神祇の誓ひ大に斯國を定め糸氏保全の爲  
を立んとし衆を不化、名教を基き協心努力せよ  
年号月日  
御諱  
勅意宏遠誠を以て感服し不佞今日之急務永世の  
基礎世に傳へしむるを以て爲す、敵を討ち  
死を誓ひ電勉後事興くを以て、宸襟を安んじ  
らん

慶應四年

總裁名印

戊辰三月

公卿名印

諸候名印

○四月十二日法橋書

竹橋 清水 田安 半藏

右に田安殿より出立り此成に在りて來お通し

外橋田 西丸大工 林田橋

右に官軍あり一隊の在りて人殺しを以て尤お橋田林

田橋より來お通し

坂下 内橋田 大工 平川 矢東

馬場光 和田倉 一橋 雉子橋

五十二

右口ノ切官軍あり其書兵の〜終差違ひ多  
但し本文は〜外ハ初〜是を〜通ひ多

○四月十二日清福也

清水 竹指 中務

右三清門ハ清水田安苗並飛石并出ハ若菜ノ竹指内  
砲無屯不為ハ清和有之ハ其の〜通行モ外ハ不<sub>レ</sub>成  
ハ

但し桑馬乘與とも不<sub>レ</sub>苦ハ

田安清門モ只今迄の通り清和飛石の其の〜通行ハ  
兼として終<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成ハ

○官軍より市中へ清福也軍

今般徳門□□謀殺シ羅状明<sub>レ</sub>付 朝廷又於之モ不  
行<sub>レ</sub>止清返討<sub>レ</sub> 終出ニ於<sub>レ</sub>官軍一日由<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>お  
成右ノ付家説流言等由有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>執<sub>レ</sub>江<sub>レ</sub>市中<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>初  
揺<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>家財等持<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>ハ若<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>裁  
又<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>□□恭<sub>レ</sub>順<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>野<sub>レ</sub>表  
以<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>わ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>兵<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>謝<sub>レ</sub>罷<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>付  
大<sub>レ</sub>清<sub>レ</sub>熱<sub>レ</sub>符<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>延<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>お<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>以  
既<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub> 初<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>清<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>寛<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub> 清<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成  
之<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>也 終<sub>レ</sub>清<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>□□又<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>腹<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>限<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>り

實效をね遠おま以上も退く祥無く 清沙法由下有之  
百姓所人共下控之由元来 天子は清民より善氏塗染  
く若くは為救い 朝廷素より 清教之より石名々  
次才考をねる於平日に通るを掛念清世了致し

四月八日

退く官守をかめくを散すく清法令と為重し於下  
善く若共第一礼坊等々有之より下 不盡家書陣取口  
下作出金儀と上玉書之山石を下有之小事

東山道總督府

参謀

内外新報

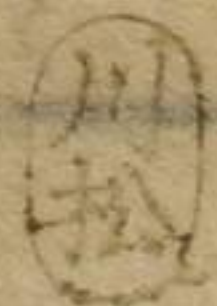
第三號



內外新報

第十三號

定價八分





内外新報第十三號

慶應四年閏四月

○野州是將より出立し其日記抜也

一日月十七日其羽出立金枝通り途中あり日鷹大隊氏  
と見らば出立會その出し又此十六日右河と急ぎ浪人  
屯集し多し居し後を官軍へ有る以て付

宇都宮

彦根

館林

岩村田

笠原

壬生

右之人殺小山岩をめぐりてやぐ不立又炮發しおあり在

六家人殺り敗軍はおありいし付 官軍初め六家の  
 ころの人殺りころころ採出し大所新田あくるまの  
 戦半よかよびいれども何分敵を大軍までくけの中  
 まかく是辰砲殺りあよびまては岩村田の内友人殺  
 りての意有るいし付者振人殺りてはかくを寄  
 りいまは人ども是元より砲殺り多しいし付あつら  
 りては返きいし付すい

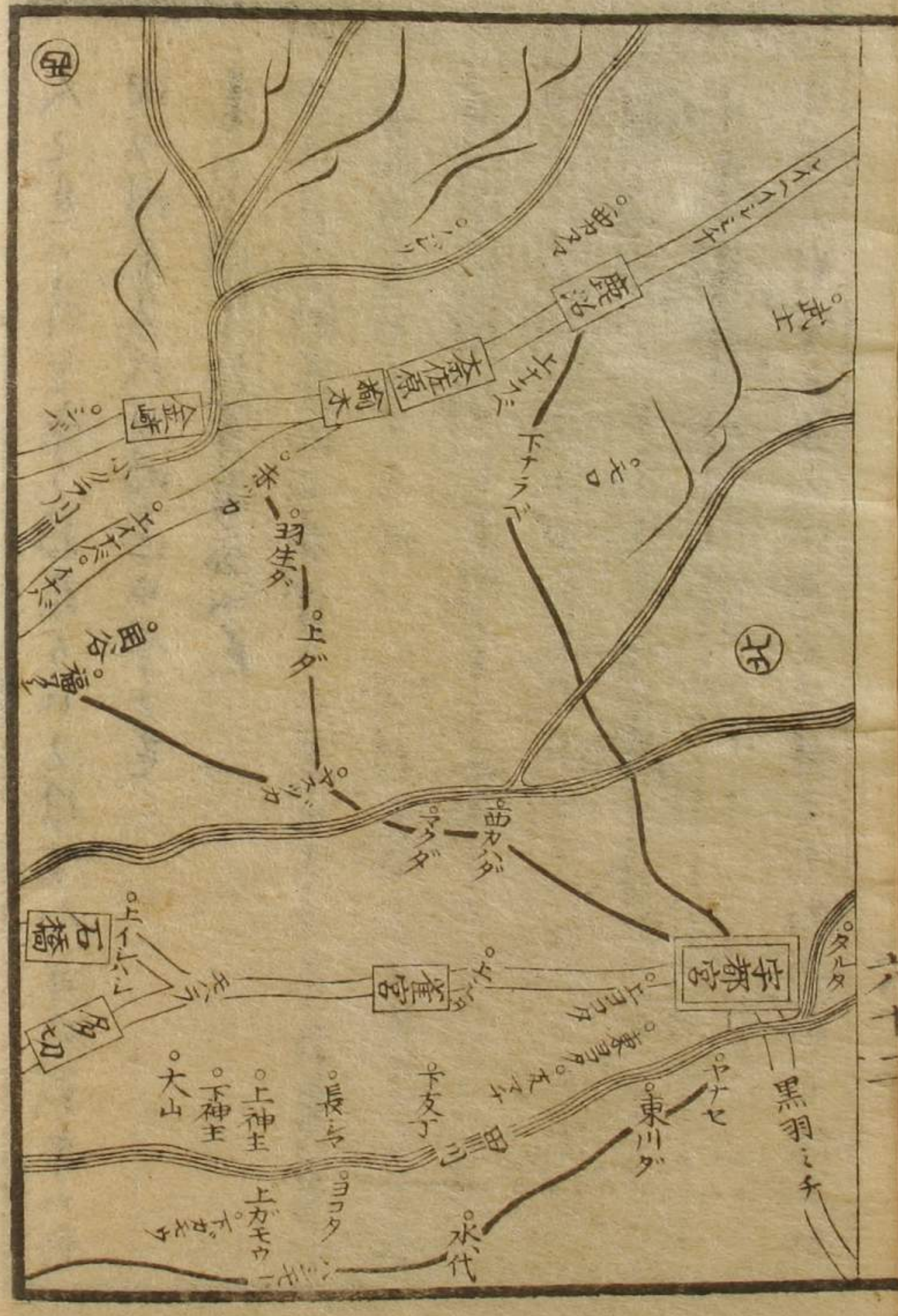
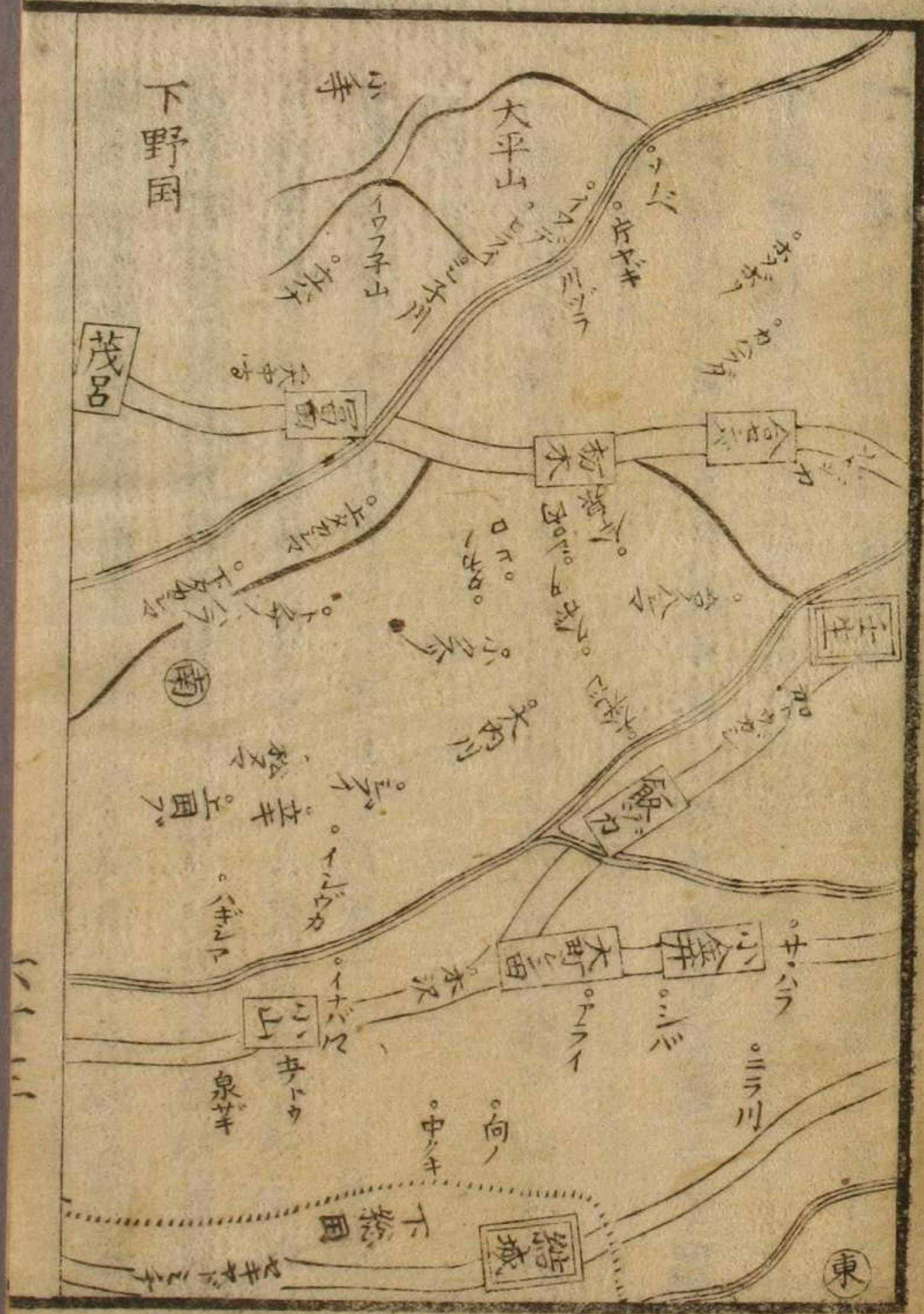
一日日夕刻官軍池上町通りの長日不宿屋より戸板  
 よのせ昇来りいし中の七八人兵介山かごよのりい共  
 十人あど是い者振るる人殺りよし即死の十二云

人こまの首ときり持来りいと風少今日の戦半の戦  
 口つ時より八つ時迄のやうき

若六つ時官軍角屋へ至

一十八日官軍出立花官軍を是いとてろ森連川藩小  
 山氏あらを人として七八人よめ合いし付たをじの振  
 子承りいし付人を右指をよ返りておあらく通めむ  
 づらしき放引をしい敵は付志をくく日おあらく振子  
 お尋ねいへともて通めおあらく是いよしよらく  
 ましく角屋を引くしすい

一官軍人数を九人位敵を大軍とぞかりあらく何々の



共と中兵知事不中角をみるに及た右浪人例幣  
世を全破家へ亦五百人引とるに孫子右月岩よ  
う注を有るよしと申しあがら小山岩よ由今以て屯  
集る人殺多ふと申す人申すよし風守

一此十七日の戦ひに大砲十五挺十八日の戦ひに五挺  
分捕くす

一佐新須坂城門守人殺由此十七日大町新田あり敗  
走の由同

一月日屋八ツ時迄健康明きい又付出急い多し表入

う右橋岩松越へ其の家あり承りいへを此十七日の  
合戦の十六日の敵とい遠ひい十六日の敵を何れ  
へこの要領はあつたいれを万人勝も有るい  
一十九日右橋岩出立小山岩へ集りいととるいち名ん  
高の海んの町中あり打合ひいやうを敗死人の死骸有  
う裏通りよと首なき死骸二十人ありと申すい  
一右河に集りい守官軍方八百人妻子松戸より清旗岩  
よあつたいとて由山岩をむづろしく冥岩へ入りい  
見張岩を渡船訪通りお成るいよと川吉じよと歩  
りやうく農家に集りて殺し殺す時色同岩へ船をた

のこい不出舟をくいと付其秋の野村に由り廿日  
舟ありききぐく本不有格正着以多しい

○初を不日法と抄写

清乃船の清本門より八舟格通り江村所大至其町七舟  
右より丁西門格玉水町常安格通り玉江格より堂清法  
船格は格より安治川船安治川格通り舟く馬島二町目  
漢より 舟系船と 控兵隊の前軍中軍の左の川岸後  
軍の右の川岸より隊列を整へてゆく堂々 舟系船の左  
右より随従の進し以て後進する年々刻天保山に  
舟系船あり○是く用をりし古藩の軍艦は國軍艦天

保山より距離を以てしり控泊せり 敵兵不より其艦  
と振り 着舟を合意せしは又急しく海軍熱督軍後院宮  
内補翼君王子同参謀佐田大納言を急止せし肥前軍艦電  
光丸より脱炮を發せし國軍艦より由亦發炮し  
皇帝陛下を祝し甘る右お降電光丸より最終の急炮と  
發し法艦を誘導し兵庫の方に向く航すること二十分  
時より時止し天保山に海艦控泊を八ツ時迄 舟系  
船清乃船清乃列初のごとし七ツ時 舟系をくく○此  
日代替し法艦の供連の舟二人に元二人下船を人あり  
舟系中の後僕を人あり 舟より供の降り 舟列の後より

後海○前中後の兵隊人数の中蘆以上百人小蘆ハ一  
小隊あり○清形判と降せんしく市中と在の店廢香集  
まると弱し

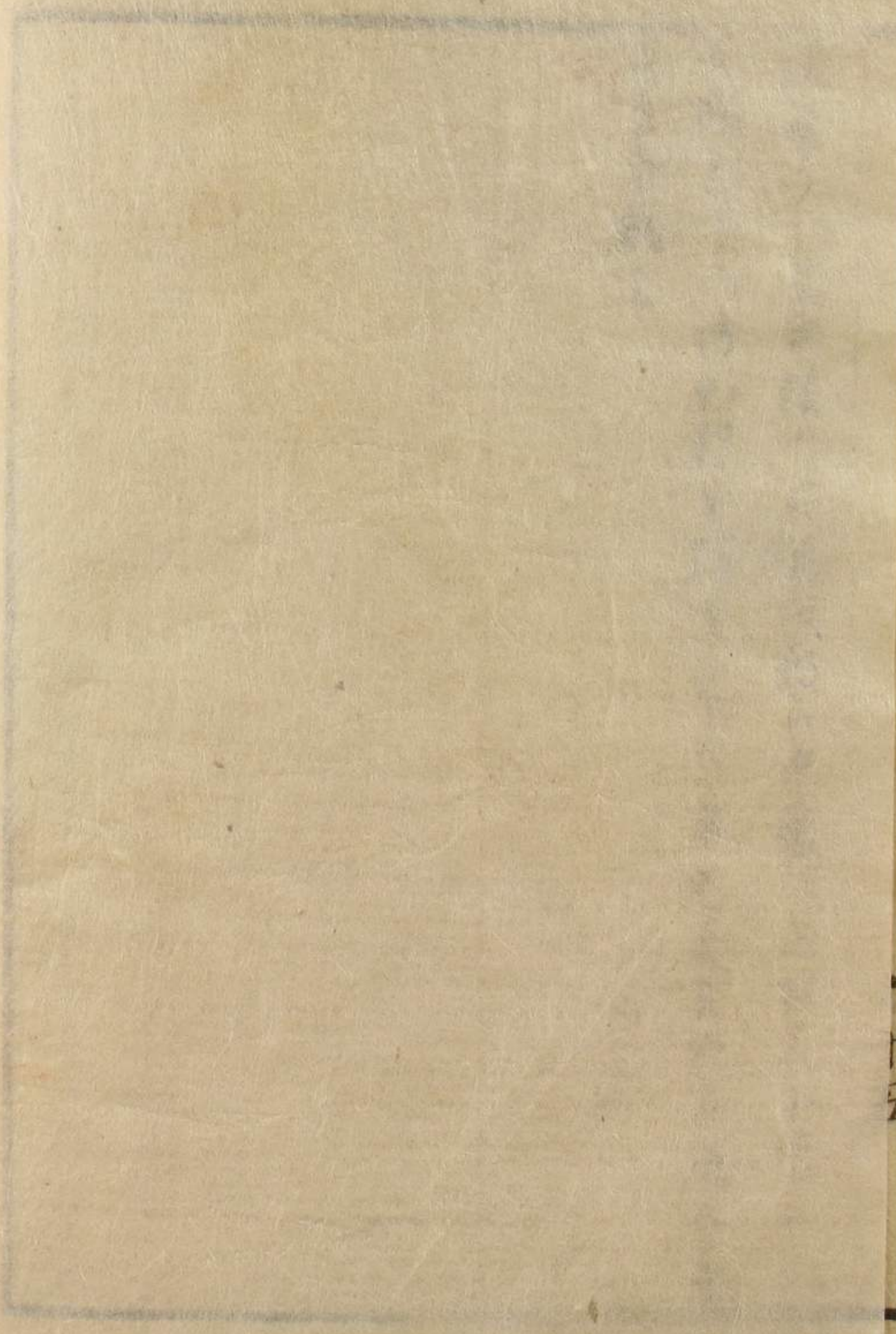
内年新報

第十四卷

五〇七

內外新報

第十四號



内外新報第十四號

慶應四年閏四月十五日

寒暖計の度ハ三種あり「セルシウス」「アキュール」「ハーレンヘイト」と  
之日用するは多く「ハーレンヘイト」を用ひ機械を以てするは多く「セ  
ルシウス」を用ひ「セルシウス」の氷点を零度とし「沸湯」を百度とし「  
アキュール」の氷点を零度とし「沸湯」を八十度とし「ハーレンヘイト」  
の氷点を三十二度とし「沸湯」を二百十二度とし「セ」氏の六  
十五度「セ」氏の五十二度「ハ」氏の百四十九度あり  
「セ」氏の度を「セ」氏の度より五より「セ」氏の度より二つ五



あり割る一〇七氏の数と八氏の数よきより七氏の数  
 よ九とかけ五あり割る十二と加ふし〇八氏の数と七氏の数  
 よきより十二と引き去り五とかけ九あり割るし〇八氏  
 の数と七氏の数よきより十二と引き去り五とかけ九あり割  
 る一〇七氏の数と七氏の数よきより五とかけ四あり割る  
 し〇七氏の数と八氏の数よきより九とかけ四あり割る十二と加  
 ふる一〇七と七と七の二十なるを四とかけ百あり割る七  
 とある是七氏の数あり〇廿八なる九とかけ二百あり割る  
 十二と加ふ七十七なるは六氏の数あり〇八七の七十七を  
 四と十二と引き五十八とかけ二百九あり割る廿九なるは

大政官旧法と抄

うく日一氏の数ありその所ハ推し知るなり  
 一 一 氏の数あり

神武創業より始り其諸事所一統祭政一統し  
 制度又所回復を托り月々の先づ第一律官官再  
 具所造る上進し法祭奠も一統なるは 出依  
 之は度不裁七乃諸國に布告し律に是ゆり諸宗執  
 奉り下り善い善く天より法律律主統官統律  
 統よりあるまじく向後大統統官附属に 律海に官  
 後と始り法事統官に統に是ゆり一統なるは

事

従し退り法杖沙取洞英法祭奠く其由に於て  
出の如く由さし向き急勢く其有る由のりて所  
出の事

一 酒井雅樂頭を以て入系官位の事

一 時次之日未刻大坂表に 所機殿社 長所を為る 在

一 以阪中來の恙く小布告く通うて其伺 天機の如く

由のまじく 天機伺不れ所者い來る廿七日に於て 禁中

及建下中上 大宮所折は由月より 所機殿伺下中

といふ事

従しを問く而へある名代を任とらつて同日に於て

伺 天機の事

三月

○ 粟指宿よりの末状

四月廿二日二本松儀の爲物二百八十箇に戸より船積  
少く利根門まじ送物右の宿まじ下しまより陸路あり  
問文へ引取了りしありて日光乃中粟指宿川家より船  
以多し以おひづきの兵ありて是を見付とのり二人を  
切捨る物引ちどきりゆき其是を所取物おひの申  
まの所より

○因家城下より來狀

四月十八日浪人凡そ五人計に少くも此處を通り曙丁  
に波里におおきく荒井町通りより五人を引、通り中  
野十六日迄より信成津に竹井系と申す子とて我軍  
ありびし間、四裏系ありて我軍有るは言ふべく砲考か  
びたゞしくおきこへ響入のりて此度  
十九日官軍方操之江戸町意丁に浪り曉七、時以  
出を荒井丁ありて我軍有るは言官軍がこし然り浪士  
方八十人余討死と申す又此度外志らるゝありて風候  
あり候とおもふ不申の候と申す候ありて候ありて候あり

勿論町方ありて若かりしに付、大隆節又此度

一十九日廿四日官軍中人子供のこゝに急退しお成り  
町方ありて一人はあびたゞしく言出し、堀丁往之由お  
体も同急役人も出奔の多しに、戸町意町名を役人と  
申す由退去申す者、賣お体もみまゝ、戸を志め、若  
外大家ありてありて、身建具等穴へ埋め急退申し、人  
件多し、仗りしに付、若かりしに付、方多し、手付の共一向  
城に難儀仕り

或る官軍の士中仙及大宮若山若の坊より下野の

何事ありんば失りしを以て多く歎くことありし  
又主人と初め終く又初めありしとあざむきらばとも聞入を  
きよくし旗亭の側に住居せし青山野村の宿人又  
く去條の橋あり多し居り上山青山と中由のと左の  
みだをせし入道しよやうくよせ併つ右官兵取致む  
事とともや

そと書ありしありし人よきらせむやありしもの園の  
山ありしむ

○系地正編とく宗

禁裏所用ありしハ 禁裏所用科まことハ 禁裏内ありし

と今<sup>エ</sup>身傍<sup>バ</sup>示<sup>シ</sup>杖<sup>ヅ</sup>標<sup>ヒ</sup>札<sup>シ</sup>等又古志るしハ其ハ有るる處こ  
とにハ変化し又更ハ以付以來急度おろしとめ 許  
科とのと書志るしハ中<sup>ニ</sup> 出<sup>ル</sup>事

但し標札ハ姓名お記しまことハ官名及名お志るし  
ハ其不若し

一提灯まことハ陶器を介賣物等又菊の所紋を畫ぶきハ  
多ハ如何し其ハ以以來存し新所紋を新し付ハこと  
此度ハ為標ハ名ト 出<sup>ル</sup>事

但し所用ハ付是まことハ 免ハハ一急出<sup>ル</sup>中  
事

右に通  
い  
三月  
伝出の案ありまぐ候はざるやうに  
下  
世

內外新報

第十五號



定價八角

内外新報第十五號

慶應四年閏四月十七日

○某官人達白書

小臣<sup>コミ</sup>之<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>海<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>の一<sup>ノ</sup>知<sup>レ</sup>己<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>近<sup>ク</sup>日<sup>ノ</sup>暮<sup>ル</sup>西<sup>ノ</sup>亞<sup>ヤ</sup>者<sup>ト</sup>し<sup>テ</sup>  
日<sup>ノ</sup>盟<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>國<sup>ニ</sup>報<sup>ヲ</sup>告<sup>ス</sup>所<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>新<sup>ク</sup>者<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>東<sup>ノ</sup>洋<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>  
定<sup>メ</sup>約<sup>ス</sup>ハ<sup>シ</sup>徳<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>幕<sup>ノ</sup>府<sup>ヲ</sup>た<sup>リ</sup>し<sup>ト</sup>其<sup>ノ</sup>信<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>ト</sup>今<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>  
る<sup>ハ</sup>政<sup>ノ</sup>權<sup>ヲ</sup> 朝<sup>ノ</sup>廷<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>内<sup>ニ</sup>納<sup>ス</sup>せ<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>由<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>臣<sup>ノ</sup>會<sup>ノ</sup>  
議<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>定<sup>ス</sup>事<sup>ヲ</sup>所<sup>ノ</sup>し<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>假<sup>ニ</sup>依<sup>リ</sup>會<sup>ノ</sup>率<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>若<sup>シ</sup>  
ハ<sup>シ</sup>由<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>之<sup>ノ</sup>疑<sup>ハ</sup>ふ<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>定<sup>メ</sup>約<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>寔<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>キ<sup>ニ</sup>情<sup>ヲ</sup>實<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>  
之<sup>ノ</sup>付<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>付<sup>シ</sup>助<sup>ク</sup>づ<sup>キ</sup>を<sup>シ</sup>助<sup>ル</sup>る<sup>者</sup>大<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>小<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>と

保護し其國の生業塗炭と救ふ各國定約の大任公義を  
 負ふ所あり同志同約の徳國ハともハ軍艦を々々の  
 東洋にむくつて其是罪を問ふんと以て実吾に玉々の  
 未だ如何を知らずとソレども必我に事の殺さるや必  
 まり右より東洋の徳國死洋者玉に蹂躙<sup>フ</sup>を内附する  
 もハ此こととして皆内附を邦内の小足地にお合せし  
 終に其國家を失ふと案を以て私を道くして其極を國を  
 破るゝ出さるゝあり今や莫吉利ハ兵庫に在り佛亦西米  
 利等ハ横濱に居る莫の下凡を好まば吾國豈この二玉  
 の下は付んや大任と唱へ以て我 實國を内附せんと

ま誠と其志とのわらふ不と其成事上は移るゝことし其  
 加ると思ハる假使終ふしと直も其國を固守せんとも  
 つハ是とを假と云んや其動 且も其意示れ其又其  
 り其石炭より其義定り如し其ある若く其を報明とい  
 はんや亦其支那の報遠く其 報廷を辱けし 其國  
 と内附を其の責何人にあるや或んや今日百年をまじ  
 して小臣を詳解と問はんとい希くハ私意を去り公平  
 其意をもつて小臣が疑念を解んこと其誠成返復言

○契於獨勝よりの來狀

一仙臺假西人數凡そ又亦其西人四月十七日を以て獨



江標之とお成の 物仗の一本田く内侍長清城内也  
運為く申は市産の仙臺一あふ山人教の台門口まぐ  
出張とお成申ひまど我奉の事よし

○  
申介新開廿十六号と繋切りの怪談をのせたり四月  
廿日夜小門下歩兵屯所より一人夜半の寝寢正より  
起きる廁カコヤへ往きしと志あるお突然と来りて既と  
突あると是およつと再び刀を提ぎて強出しとその  
まゝ斬倒しと人多と志く人々集り女抱せしうむ  
能く正体は成たり志するは繋キナリのかちと二三も難

きたる地とよりしとこ是の狸の祟りありとつと  
人なり花取申と結着の杖ありと年久しく一の狸住  
めり志士為念物と杖は供されたりと夜半時計り  
あゝ怪事と志するはけ人かゝる事とも志くは  
是のやど職是とお石をひちりて杖は抛付しと折よ  
く格子の石と入りしうを供する二之度抛るこその  
まゝやゝとぬりしが夜半を切ら身たり候結着の  
杖は瓶の位まじしと杖の位しは一奇事と云ふ

○  
同日月二四年後零時十五分とお門津のかゝるあり

七十三  
く砲撃きこゆ横濱又放り外國新砲をうつらと思  
ひく神時儀を名ると砲發のるらるひい二秒ゆるら  
十五秒ゆるらひ一秒又い二十秒ゆるらしく時るそら  
ち此その音由空砲といちらひそらと又砲をきりり  
翌二日の秋十時ごろ日本下のうく又火の光りるら  
未半まじれり滅せぬ五日の夜もまじりし加こよ火の  
光りたるら新徳市門八橋新橋の邊又幾年ゆるし中  
ありさきどもつらとそ確報をぬきまじりくよを伴  
たりこくはのきん

野村守教官の仔細劫ヶ申の測量より是の日本京師  
の東緯度十一分二秒北緯二十六度三十分三十分  
秒よりよりとらるらに戸の城より方位の六度十  
一分距離の東経二十口至二十九丁余とあるら路の  
屈曲ゆるを以て旅りの里數の二十六里十九丁あり  
とらる

一 同日八橋市川の邊に戦事と見ゆるに法徳中山  
は陣どり 官軍かく後賞徳有る大お慶お佐大系  
阿波藩お名の内人救市川よりゆるを出しとお成り

右浪徒中山の上より發炮の多しはあむきあくと砲  
 勢かびたをしくお夢へ控ましく 官軍百人扱百人衆  
 の茶飯之艘あくのり出し堀井猫ぎのみをまぐこらせ  
 いたところ右浪徒ともい故ぐくまてしものふひかみ  
 あくあ中よ飛こもいよしあくとあく川岸より晚  
 走がくよひやあくくつ又發炮の多しはあむきあくと是  
 まくと砲勢おましくい 官軍がく怪我人の多くと  
 中よあけい

一 細川浪徒百人扱市川の子あくあめめつ〜 飛りい  
 ところ豊田日己く切ごるあ川より又おあうい中

右いあゆいよい卦あるとおふりうきげも後晚き方  
 戦卒のあおの川とがづきよ又屯衆の多しはあむきあくと  
 是中きけい徳よりあ招きい大寺焼失のよし

右い東佐の藩警は日八とくをまがあういあのみ  
 侍少のよし

○ 日十月八日出上湯よりの末状

一 支那よりあ威國を通りぬ市巖峯山をこへトルコと  
 普あ亞の石よたを印〜

一 暹羅國は法祖あのみよ〜ら生〜  
 一 支那國內あ時年候あ〜く政経已法圖と案物を改定

し貿易まゝらんは始まる

一 天保より蕪蕪紫右の地を以て鉄石を此に火輪車を以て  
てあつた法國の物産を運輸せんとい

一 支那を改てしぐくあ洋者其の法を學び英吉利の大  
學師韋先生をうつて右を保護としと由り又國政を改  
て其地軍勢をあるまじくせむと洋法を利ありと云ふ

內外新報

第十六號



10

内外新報第十六號

慶應四年閏四月十八日

○同日二日出板タイムス新報の抄傳

小方の法團はあつて新政府に對し終に起るとして其の書状を必の者より取り即ち左に記せる大名及び旗本舍津候を杖平 帝に向て戦ふ為るに舍津候と連合せし中その大名および旗本の即ち古井大炊政日大邸又子及曾丹羽長門守津輕越中守南郡大津守佐竹右系守支津越後守日若狭守相馬大膳亮中山内守中平□□□と杖平正大岡酒井古傳門尉本

多□□□□を始めちとんどお國筋の大小名こまの  
く舎は作しあせし夜を名すく多し右お軍の人  
救進く増加し二十二名あふ人満しと么ふ右の軍  
勢江戸より凡そ二十里ちどをあま一系一人救を配  
かし要害の地陣を居るよし

本文お玉の者よりぬしと么ふお状の奥お春生  
原村の高人の手もある横濱を乗る途中の機板  
既しと地書りお又お平基作のまふとちお平漢時  
さ本多のお庄の批即ち宮内少輔その後くるると  
おそく荒地を稽よしと大よ人を感とをよ玉の今

其妻を擄殺しと云く荒し布告き

中八月八九日即ち我四月十六七日薩摩お佐戸田  
養根即ち井住掃部頭作等と共人救凡そ八百人お軍  
の伏勢は遇ありお軍の急くお軍の急まじを計り知  
りしおへお島のおる凡そ五百人おど埋伏しお軍  
の程よきおまごをるを待てお一度お起りお祭砲せ  
りお方勢八百人お内免ま去る者おづらよ三十二人  
あつとぞ右の江戸よりおく方よけりお総荒波山  
のふもとよ一々村の近をよあわく起しよしあり  
あつらよお方の勢の各お國より多勢の援兵をけり

又よきお國勢の江戸を恢復せんこといふ是れありと  
を我等<sup>記</sup>者もど討論せしごとくは幾年の終りの多  
分會津級免□□ 朝廷はあつて一の儀事官に命ぜ  
らるるあり

○  
福沢諭吉其新法を以て塾を立て慶應義塾と号を因て  
月二日工綴を以て始しめて塾を印して今其塾記を以  
て入るる故より其載を以て塾則と其名を以て玉を以て  
此日正に入るとを志るを以て

慶應義塾記

今爰に會社を立て義塾を創り同志諸士お共々深究切  
核し以て洋學を以て從事するや事と由私より以て廣くこ  
をせよと云ふし士民を以て從苟も志するものとし  
來學せしめんを欲するあり抑も洋學の中より其  
始を尋るる昔享保の以長崎の代官某等和蘭通志の使  
を以て其國の文を讀む習ふらんを以て速く先  
を賜るぬ即ち我邦の横文字を讀む習ふの始あり其  
後宝曆昭和の以て本居陽翁を以て其學を以て唱し又  
其野葉化桂川南周村田鶴舞等起るを以て其學を以て  
の學を以て志しお共々切核し表はるるなりと雖も洋學



味の世あまは書籍を之しく且つ之を学ぶは所友を茶  
 をば遠く長崎の洋官に就くは教をしきと可き偶と和  
 業人又遊ばし其業を賃せり蓋世人と孰れも英通卓然の  
 士あまは只管自我化右の業の之心を委係日夜研精  
 し腹食を忘るゝよまきり或は傳ふ業化弱長崎に性ま  
 と和業徒七百餘を学びはたりと是又中々古人力と  
 用ゆるの切あると其業の難きとを察せし以後大概  
 云は字田川槐園等継起し隆々天保弘化の際に至り字  
 田川榛久又平井伝乃箕作阮甫杉田成卿兄弟及諸方  
 供庵等接縫架かたり是際や後文の法漸く開き法

家徳侯の書院續せし出ると雖も概ね和業醫籍より心  
 と旁ら其究理天文地理化学等の教科に及ぶの故に  
 高村は書を唱し其業とつて是蓋し時と雖も通商の  
 國ハ和業一筋に限るに其業をさるや唯西陸の一長崎の  
 とあまはるを去籍の之きと漸く想へ修業の乃其た  
 伎ありざしハ事ごと隔靴の感を免れん然るに其承の未  
 亞英理知人我に渡來し始り和訳貿易の盟約を信び又  
 其好を英佛魯美等と通せしより我邦の形勢遂に一變  
 し其の士君子塔彼國の事情と通するの要勢たるを知  
 り固く巨魁の學術一付と真り者其書を著唱し生徒を

教育しむるは、正しく始る洋学の名取なり。是實文學の一大  
進歩あり。必や願ふは、一車一運のおも、閑らんとするや  
進むは、必む漸を以てを登へば、於樓閣は上り、又階級は  
るが如し。乃ち天保弘化の間、洋学の初を以てし、ハ室磨  
明和の法哲こそ、階とあり。方今洋学の盛んあるハ、各  
國の通好し、固ると雖、由実又天保弘化の法、之が次階  
を成せり。然らば、則ち若輩今日の盛陰、又遇ふも、古人の  
賜、又非ざるを、乃んや、抑洋学の以て、洋学たる所、や天  
然し、服膺し、物理と格致し、人たを、門海し、身世と、業求を  
るの業、又し、其実を、要細大備、具せざるハ、あく人とし

く学を、まざる、可らざるの、要勢あり。之と、天志の、業と  
偶る可あり。ん、若輩は、業は、後事と、するや、是、今、年、所、と  
し、へとも、懐く、一、班を、窺ふ、の、と、あ、く、百、科、浩、瀚、を、望  
洋の、嘆を、免、せ、況、実、一、大、事、業、と、称、を、べ、し、然、き、ど、も、難  
を、見、る、未、ま、る、ハ、丈、丈、の、志、は、あ、く、は、是、を、あ、く、と、知、く、具  
さ、る、ハ、報、の、義、あり、何、方、う、蓋、し、時、を、と、せ、し、擴、め  
ん、ハ、の、学、校、の、規、律、を、破、り、た、り、重、法、を、教、導、を、る、と、先、勢  
と、以、仍、く、若、輩、の、士、お、其、は、僕、を、私、ら、し、彼、の、共、立、学、校、の  
制、に、倣、ひ、一、小、區、の、学、舎、を、設、ち、こ、し、を、創、立、の、年、号、に、取  
り、候、も、し、慶、應、義、塾、と、名、く、今、是、日、月、某、日、大、本、の、切、を、後

め新たに舎の規律勸戒をさくを禁くハ若輩の士千里  
笈を擔ふく世に集り力を高し智を養ひ進退必を徳を  
守り交際必を徳を重じ以て徳日世に海を舟の舟を志  
亦國家の爲に小補あるに所く此日又後來世奉る傲ひ  
是く其結核を大にし是を舎法を盛んし以て後來の  
若輩を徳るすハ若輩の先哲を慕ふがごとく此を得る  
亦一大快事あるにや嗚呼若輩の士協同勉勵しる其切  
を奏せよ

慶應四年戊辰四月

慶應義塾會社

○四月廿八日法儀に由書寫

徳川 □ □ 隨々悔悟恭順く執念謝罪く実效おさす  
□ □ し可分且家名社を小く付相續人おさす比又秩祿  
多し後輩儀に論を執り 評裁決社を爲す 思念あり儀  
事有くハ百昭後廿七日すぐハ名見入り封書に封し  
筆尾をのりく大政官にテ呈出板社 俾出ハ事

○四月十日日保正寺殿大小由目付に由渡し  
書付の字

別紙に書付鎮撫執事府より社 俾甚ハ衆市極意極意  
く相心に保正のりく儀慎りて社を奉るすまがし倫しハ板

下中渡

右ノ通田安中納言殿より  
右ノ通田安中納言殿より  
右ノ通田安中納言殿より

同日

朝廷寛典ノ所不毛トシテ  
一曰後世ノ所至ノ名定  
後從脱走ノ者之也  
徳川家名ニ付款念ヲ抱  
以テ其ノ始末ヲ知ル

お度り月然儀局ノ所不  
安堵ノ場ニ即リ  
ひきく振来ノ事  
と之ノ家名ヲ勿論相  
毎々同新款念ヲ抱  
賞所沙汰ノ事

東海道鎮撫

総督 印

○

件更ニコモト意ノあわ  
去日秋戦ノ方ノ船

内外新報

第十七號



明治

由志をされど一艘の亜細アトカニ艘の西洋船日本  
船あるよしともは勝敗の儀ありげとつごも小田  
所は強丸末をしと云々

又八十八

內外新報

第十七號

定價八分



内外新報第十七號

慶應四年閏四月二十日

○同日二月出板タイムス新聞抄訳  
横濱洋館の商船

英吉利船九艘

亞美利加船八艘

日國汽船七艘

普魯士船五艘

荷蘭船三艘

英國汽船二艘

船名クレイトリパブルック

船名ケンジス

月港洋泊る軍艦

イギリス 英國軍艦 二艘

一 フォルム 大砲二門 式百三十六頓 六十馬力 形船

ゴンボート

一 プナップ 大砲二門 日希 日希 日希

一 ラッラル 大砲十七門 九百五十頓 三百二十馬力

形船 コルフエツト

三ツクス 英國軍艦 二艘

一 ヴェノス 大砲廿二門 二百頓 二百馬力 形船 コル  
フエツト

一 ゴイラン 大砲四門 八百頓 二百馬力 形船 月希

アソカ 英國軍艦 二艘

一 モノカシ 大砲十門 八百十九頓 二百馬力

形船 ゴーボート

一 ストリーナル 大砲二門 八百頓 形船 スチー

ムラム

一 イロコア 八百十九頓 八百十馬力 形船 コルエツト

オランダ 英國軍艦 一艘

一 キユラコ 二百四十頓 形船 コルフエツト

○ 同日月三日出本行陸より來状



一晩二日の方 官軍方八幡所より北七く不脱走方中山  
 村法花境より打出し引つゞき市川村をめぐり戦車  
 又お成り同村兵火より逃れしに焼失あり村より去  
 向路の臺を介強ぐ菅野野田あり戦車有る 官軍の  
 人殺退り山操出しあり高村より山通り田尾村に  
 へ阿久人殺陣より脱走方船橋乃中途に出張系木村  
 二候村海林村等にて是より戦車お始りい不俄に  
 官軍方更田茂重の人殺し中より浦面より和を包し  
 和橋若浦に返りしより大砲ありけし時日より時終  
 夜の戦より同宿より八幡所占むるのころに焼失あり

し打凌き合戦休るふく今日も不く戦ひの宿中より付  
 来ど決意の勝敗をおろしつゝ高村の戦場の上中より  
 ていまも其火よりかゝる不中よりいれどもは上女にお  
 成り外難計一日為水と踏むる地よりをい

○月不家寒風同虫写

二日早八ツ時以松戸に着く 官軍星山勢石女入夜  
 曉七ツ時以八幡所より平田村に操出し脱走方市川  
 新田腹切地帯より不より小銃打ち 官軍市川を  
 ころころ新宿に引上ケル中市川より不意あり官軍が  
 大砲脱走勢あり小銃をめぐり打合えあり船橋

の方より大野黒田勢と戦年

一 晩走方の取捨より二ヶ村定ある大久保村へ人殺引  
上いよし

一 日夕七ツ時以後豊勢市門を渡り大砲二門人殺凡  
そ二百人程あり八幡所は標出し市門新田通勢

一 固執ありびと休去系人殺二百人許松戸宿は一泊翌  
曉七ツ時以後標出し志蕪所と申所あり戦年お始り  
怪我人等及治又有之ゆゆも勝敗の義ハハ手どお  
かり不ヤ

一 日夕七ツ時以後松戸令所冥下へ獨崎人殺お固め  
一 日夕渡し船止る五日船通勢とおあり

○同日月六日出振ケイム不新岡の伏

江戸より水の方よりあり去る日曜日即ち戦年日  
三日戦年ありし戦の起りし地ハ江戸より四里の内  
ありと云ふ

いまだ此戦年の委細ハお分らぬ志らし今又由報告  
何れんとおめをる○去る日曜日の夜江戸かよび近  
を又お所の出火あり当地より由火より見えん左  
耳

○ 式人の活しよ英人「ハルトリ」ハ當時大坂へおちむ  
 き江戸堀二丁目へ入かつや町あり醫師西田氏の  
 許より居し醫を以て業と以てかこつて船來の糸を向  
 きあふりある時「ボム」の節を多く仕入るこをよ一種の  
 氣を罩めには粒をありきり糸を付くこれを室中  
 懸け糸の糸をよ持ち繁むの町くと此糸をよ  
 親も若群をあり金を出しよこをよ買をんと里む若  
 多し故よ又よ利を以たりと亦善く人氣を撰るるよ  
 妙と以りし和浩よ亦よ通近隣の小児も又集

そくハルサンハルサンと心易およ來をよふを無勢  
 の切り由よく是よ善ふとを實よ一時人とよふ  
 ○ 教ありぬ牙以しゆまど世中静しありきり  
 時代を物々あふれ世りよよあり  
 何れをよびあびきもやれ枝やして風まうごうぬ  
 春柳の蔭

○ 日月晦日出尾羽宮宿より月の來状亦七日出を  
 以て木音浪縞縞表よりの子打ありて來りい  
 よし

暇去方の申あり凡そ六百人あど越後路へかき來り

日く人殺おまし越後野と戦年又おありまより佐州  
版山城主本多相物作人殺と戦年と過り版山沼坂  
あ城とも紫とより同國松本屋分まき先手押来りし由  
由ちや尾物市川分江向ひしあとも難計敗又今日大  
山富頭せ外二番三番五まき市標出し佐州市川分市  
園の山を向又お成りし

○孫生の此世の中つとはまがかりかろを能は  
世まのよりの縁此山をめぐりきくかひもあくあるぞ  
まびき  
よまの人まらば

日本書紀  
卷之八

一

內外新報

第十八號



定價八分

内外新報第十八號

慶應四年閏四月二十二日

○閏四月二日由京赴上りの來狀

野分我率一乘又付法薩西人殺西操出し大坂表より  
逆氣詔あり由出帆定り清地江西着と其存以志つる  
不尾物大納言極日月廿七日中仙乃守山宿西泊り廿  
八日大津廿九日京赴西着と詔清先編り処廿日由  
山宿西發智西途中より俄又西引至し又お成以毛次  
才ハ後物松本落城松代むづりき極不返り英法諸  
江押出し以詔本幕諸より不打せ以り名在登嘉江西

注進依り系地はあつてより西詰り西人殺助三日を又  
殊く此西引拂由由と申す大坂表詰り居り元平代  
極由美日西暇あり近く由由國は極り越且又之由横  
須賀吉田屋介尾張之河遠江美濃の西大石方殊く此  
由暇過く由由國と申すあり東坂ともことこの外務ヶ  
安多又西岸と

○横濱新國より抄出此  
横濱病院

但し法病病院及び痘瘡病院とも又此れど出来せ  
しりて披露せ

右病院あり病者老人は付一日の入費左のごとし

才一等 日ドルラル

才二等 二ドルラル

才三等 三ドルラル半

日奉人交り人マレー人 三ドルラル

右病院に入らんと思ふ者ハ病院掛り「タフリヨ、エイ

チ、スレ、ス及びビ」ト右あり内は侯判り「送る

怪我人多あり「スツレ」チャル入用し時ハ差出し「ヤウ

是ハ帆本強より製したる物あり右側又樽あり此

樽とありあり相昇<sup>ニテ</sup>ひ内ハ病人と載せ恰も物蓋の

ごとくたれ具あり

令限英又四き名表書繕於茶盤等の施物と病院の掛  
里より受納不致事

横濱又控りふ八百六十八年

才日月七日

正ゼーカ井ルキン

○大坂表より凡岡書

一薩長両藩の勢軍艦あり大坂出帆の國に巴り佐渡に  
押寄せまより越後新深の山を向し根子西人殺凡そ  
ふ日五百人との事

一岡日月初日東幸於<sup>カケミヨ</sup>各國の使節

天機洞として露出程々頂載物有るより

○乃在所日誌抄写

日月三日城内に於て各藩の兵隊 敵覽<sup>アタリ</sup>あり 控り  
あり左に通る 俣出さきたり

明後五日行くと刻 所發輦流陣 天覽の爲め城内に  
仍幸あり 在り有る 俣出の事

所道筋の儀の表所門より安土町通り場筋右へ本町  
通り若町まで右筋左へ大手筋より 所入城の事

但し雨天の節の所吹延の事



四月

同日雨天二月 以事所成延の由は 俣出たり  
 同六日夕の刻迄 津敷鞆はる 在名藩と兵隊を急ぐ  
 津沙清りし多あを早思より城中二の庭に掛ひ屯  
 集せり居り別城中に居練 天覽所へ 着所はる  
 在連は才一兵隊薩州兵隊越前の人殺隊列ととのひ令  
 又陸ひ候の操練場は進も運動祭砲とあり終る迄ぞと  
 次々才二隊長かの人殺隊と才三兵隊細川柳沢北條の  
 人殺何れも順序とりつゝ操練場へ代り多くお進も運  
 動祭砲とあり右操練場と名藩兵隊へ酒肴を賜ふ 津

沙清り此才左に通り

今日潤練左儀は 思念柳酒肴を下し賜ふ事  
 右統陣 敵覽悉くお済し後 津告りしと天守基  
 津巡覽はる 在才津馬見下は 照津儀と桑馬  
 天覽はる 在名藩 俣出あり此は移る公卿法服各  
 馬を津馬場より引させ桑馬を始めたりしと大に 敵意  
 二叶はるは一日の由は強を逐ひ見せよとの 論言  
 ありしは頻に強を逐ひあどしと 天覽は供し甘き  
 是未の津刺城内 津敷鞆津敷合より 還事はる 在名

日月八日午に才刻松葉丸國「コル」へトチプレキス船名の  
指揮官カヒターニテフリケイト第二船將ヘルガスチエ  
チトワールス名英吉利使節館ガク「エ」ビエトホル  
ト 乃在斯に案 上を補弼中山郷所對面なり外國車  
勢馬利車誘引を蓋し過日 皇帝陛下所機嫌よく  
所長輦の序軟びを「上」甘るあり未の刻退出せし

○  
日十一日己未刻東本紀古掛石に「乃」孝経あり 在儀を  
兼ふく面を 所對面なり支「乃」儀之の演武場へ所  
在あり 在厚くあり 玉簾の中より所親兵の演武を

天覽あり 在相海を 入所候より讀書儀義の事をは  
り出 所産し間には 石出親しく 天類に咫尺し甘  
く儀義を始む松浦肥前守大學より三徳頌を儀し國中  
之補孫子の謀攻篇新田之節三器より上器を儀し多し  
の如く文武の乃を偏察あり至る盛に真きせあり厚き  
思食の経儀より有難き多あり心や申す才刻に玉  
所機嫌よく 所還者 在りせしむ

○同日 信出の字

来る十日日灯の才刻抄ひあり元陸軍下より格く供甘  
名儀法兵洞棟に 乃付惣裁系より軍防馬見分のあり

紅毛出奔 所沙結以事

四月十一日

○  
月十日卯の末刻より若番と兵隊元陸軍所近邊に屯  
集せし時刻の指揮に随ひて一兵隊操練下り進み網練  
を始め早くと下りたる次より二兵隊代り進み網練を  
おこなひたりと七隊より進みたるは進みたるは進みたるは  
刻ごとくぐ後退敷き

內外新報

第十九號

定價八分



内外新報第十九號

慶應四年閏四月二十三日

○甲府よりの風聞書

- 一 甲府侍城代水野出羽守人教に小隊惣勢貳百人陣し  
て退き侍殿迄へ陣取
- 一 掛川勢百五十人初と長禪寺に陣取
- 一 奥平勢百五十人陣し折所は陣取
- 一 遠見川内筋百姓騒ぎをいよし
- 一 越後新深より上陸の脱走共出雲味より法橋後江押  
加多門廻丹波鴨川中崎坂山迄より我軍有之松代人

致残らば甲地を引上りて勝敗いあく伴ありは

○同日日出編修より来る状

同日日出相彦内より清喉又相成り山派士天童  
はか！案清城下所家とも焼くはひそきより山形は  
向ひ城備更寄有し淡し家上川流あり、大合戦し相成  
り山形は市中のころは戸を切り三日まを引つゞき  
打合不おひし屯仙基より由退り清加勢清操出し又  
お成りなぐ沢三位殿新衣へ山形人殺し共又清出張  
しお成り跡おく右戦事始りよし山形のゆり吐  
しよ山形は

○四月十二日 朝廷より清布告の家

先般 清誓は乃を 清家頼を以て清布告は 治出の  
通り 朝政清一新の付し薄く想く管易管器く 思石  
とありく 清國体清更張は乃を治事依りて於諸  
藩も 清頼をを新徳述し改令を大更草致し 宸襟  
を安し守りて板をくくは不お海法牙勿偏の事よは假  
令慶元以還受封く國法制令たりと確るも當今の時勢  
又相合さるの故も然然察并致し清一新の奉本を相を  
く 朝廷は藩一統く全力を盡しゆくこそ日新の 聖  
業相致をい清りよて有る然るよ 朝廷將門の政權を

事に及しは極ゆるより優古と申し候へども只 朝廷の  
御事のよしと相ふり候者も有る候は相ふり候よしを  
事よの作各儀 敵意を甘御徳一新く奉本を建するに才  
一四習因循を打破し賢文を奉け國政を革むるは在り  
然るは法儀多くは任掇を主とせ候るは門閥を以て政  
柄を為す候より随て四習を改め吏雅除く是より有るは  
今般 朝廷におあはれ候も候儀門流を以て廢候はどの事  
有るはへむ法儀におあはれ候も世福家格を以て政事を考  
らよし方今の事儀は相合ふ候所は候は庸劣を以ては  
へざる為の是に廢絶し肥帯に掇擢を以て賢文を登庸

し國政十分は改正候し候は 皇國一体優古は法極  
也 敵意し候板 所は法候事

右に通知 始出候上の法儀速に実效おえり申若し  
考用におん候に因循は有るは向いおよより法取  
しに有るは依るは是に諸國巡察使は各向以て政績  
了候 用右に各世命おん候に申す

才十七章中は佐野版山落城候事とのせし事右に全  
く傳聞の誤よししは本月七日同不より出候候もの  
就くは確報せ候事

城後路より来りし暇走兵坂山を攻め城下焼くハ城  
後坂戸隙の冥よあわく我軍よあつび坂山勢敗走のと  
ころ真田く援兵とゆき落城せし右派徒討ちとしく虎  
お勢三百人降出張去る六月佐州坂回と通りせし由

○  
四月橋頭聞子規西人踊躍東人悲踊躍悲憤不免偏已  
見戎虜移伊小六十六州因兄弟隸夢願使金甌全君不  
見望帝之眼高千古蜀王宮殿棄如土寄語世間忠義人  
何不及時修牖戶

失名氏

○贈青眼居士并和其韵

欽君為國起諸賢無用吾曹便泰然小院沈沈春晝永床  
頭笑掩十三篇

六橋外史

○徵士井と石見建書一通

概夷函振くるり又封塞械と製造して人力と荷器と  
の策と勢とを存い旨言と仕りところを策如何と文  
又 序下向と蒙り愚針と願ふに忌く書紙のまゝ書  
是上り

蒸氣築械ハ俄り製し難く是ハ先づ水車の一車といふ



考るに申すの事あとも六十回を巻く故又一回を人の  
考に代はれ六千人よりなるの程あり我國民の大故大  
凡て子弟人とするに一日二拾万石を食は一人食  
刻を人あふふ斗づゝ巻くあり一日に拾万人より及ぶ  
試ると右に拾万人の雇錢をふるると名ると死に幾  
多の先費あるやその酒造等を用ゆる所の米穀を加ふ  
ると死に幾多あるやその酒造等を用ゆる所の米穀を加ふ  
く家と眼とをみるに天下に富強ありけざるや  
然るにたゞの井中<sup>ハミゴ</sup>は枘子を下し水を汲しむる家  
らん誰々是と見ると愚とし何故に井戸車を用ひざるや

と怪し同ざるこゝに成得んや世人かる一家の小費の  
易く顕然たる國士の供養をやとせざるに歎かしてし  
きこくとをせし人皆一家の府吏と見るごとく一國の人  
民と愛惜し返く器械を以て成し得る限りを極めを  
又人カと費さざる極遠大に思ふを盡さば必家富強と  
あり事又何ぞ疑からんや  
右思案の概畧は此なり然るを是と一家生業のちめ  
又水車を言んやあど死ふりの有るにそり地所等の  
故障よりせ賄賂を得ざるに許さざる者も有る哉  
又承りて右等しとの天下に大差あるは出る事

知ざるの勿論より得ざるの由来に際しては、  
公私の種を辨別せずして、國家の善悪を  
事の迷と辨別せずして、  
しよ相成度む下し、  
十分の手と為るを以て、  
後上敬白

四月

井上石見

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

内外新聞

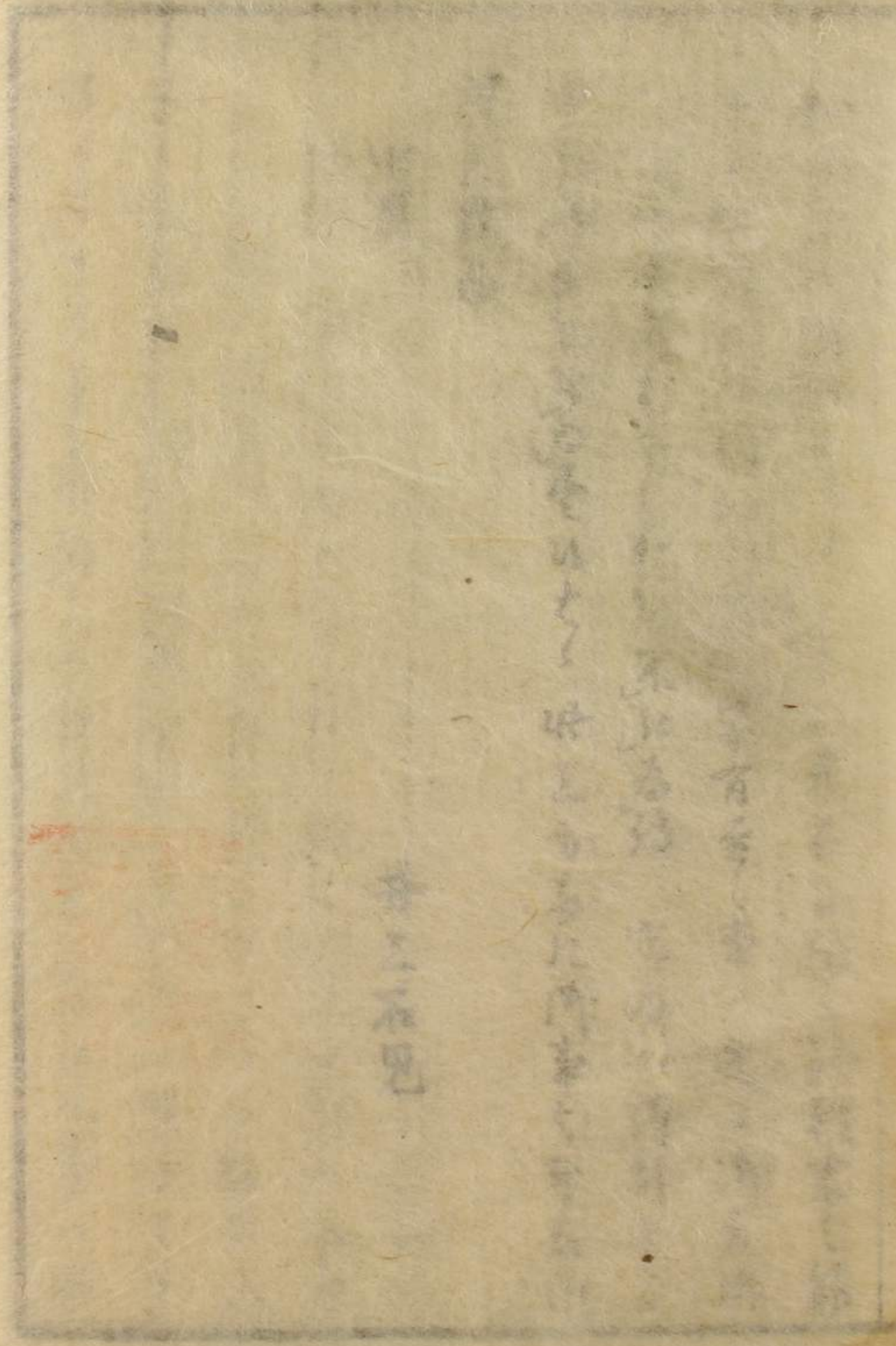
二十號

*[Small rectangular stamp]*

内外新報

第二十號

定價八分



内外新報廿號

慶應四年閏四月

○同日十月日出本更津よりの朱状

一 去月中より苗下北をせし浪徒去る七日婦ヶ崎  
 の近をある津<sup>ギョ</sup>と云村又出張せり官軍藩兵勢一  
 隊と我軍相成り辰下刻より軍敗退をせし由且  
 つ近隣連合の諸家應援の兵と出立者ありとぞ年俚  
 より合戦やし砂兵をく何地へ退去を然れども近  
 傍の民家兵火又かゝるもの頗る多きよし

一 當地市中の騒ぎ一<sup>ト</sup>方ありん婦女子の泣叫ぶ聲甚ど

しく然れどもおれ合よく大捷のおあり江戸の方へ  
退きませり

一八日苗圃より二之里脇海岸の山合ひあり砲烟あは  
たしく相見へ日夜あり矢火有る曉天は玉つと  
徒減せり

○才五月二十日即我軍四月九日成るお國人よ  
る横濱新聞紙局に送る書状と送る

余今於「フランス」波戸場を通りかゝるに「改」の雷管  
を五ヶ放散せん斗に「用」をせし「小銃」を携へたる日  
本の歩兵は十六人残り小銃より上陸せるは僅か

けり

戦闘の關係あり地を通りまると斯く奇怪ある春部  
とある事へ及してお國ありは件さきさきあり

横濱の地の「國」より日本の國より属せしとつと「七」は  
「換」せる筒を携へる兵隊と上陸せしめざるは日本  
政府へ掛合ありと然る事あり

右に兵率護衛の氣質も又相ふらば一旦何り出  
来せし急ち兵庫の茶畑と踏むとある事あり

昨日到着せし砲隊ありは列は新聞も多し唯「アビ」ニ  
「ニヤ」の戦車の幸ししと早きり「セ」ト止り死し信慶

いとおとくく敬まをあり

「アビニニヤ」戦争の本事詳くは横濱「イリ」新聞  
又見「あり」セ「ドル」ハ「國」の名録「君」あり  
去る月四月二十日即我四月八日の夜箱館の介國人  
居る地獄に焼失せり

○仙臺よりの來状

去月中旬の以余津退討としく仙臺勢掃出し一高  
ハ白川嶺又玉り丈より矢吹嶺突門取山本宮二本松  
橋邊嶽と來りし頃分すを引續けりハ不令津野  
諸苗代より山越ゆり嶽と陣營と藝藝いゆしハ中

勝敗未く詳あり

首夏書感

失名氏

漢く愁雲西復東起居淚濺草堂中昇平二百餘年業  
誰把神恩付太空

佐あ高瀬願より去月廿八日出立しき來りし者の活し  
又世程新深より腹去兵之ふ人斗り歎然としき上京の  
越又付尾唐人殺右方面めとしきハ酒落白向ハハ中  
道中より野あ戦争の噂伝くと有る急角□□敵敵の汗  
名こそあるらむハ戦ひハ止むまどよの風流なり

○題志

山崎茂祥

大まきのみちしん見ん歩んまきまきる圃んらみ草の  
あきぬしきや  
のんくーとわりふ日もねまきあうらまき  
小むいんやう

○四月十一日東叡山よりの所甚書

宮極所と多々候ゆふ来る十九日 所發與所治定  
の香日光東台其外所配下向の不及中廢下く士多筆  
江戸市中近在近郷多哀所歎申出就中市民最近  
近郷候と身命を以て甚遠 以與者又孫 所發與

以相成以たて 膏業をも相廢以飯も中出日く東西又  
委を以中不容易騷擾を付分 所發途茲茲遊以同  
所と多々候と人心法難以近所延引候 所出以同不  
候振ましく通達了有候事

右、付四月十日東叡山に所禮としり諸寺山伏  
百姓所人多羅出諸寺諸山伏等山腰あく殊く介立  
候又宵々見物弱貴釋集以多し以中

○四月廿八日熱督府より會津に所書付矣日  
所書

松平肥後守事進と黒知又及小飯より傳在既と罷冠

と俊一為成紅者以上の悔悟伏願所仁意を以て於  
之の寛典より紅を以て間心得遠き振に仕有 所少  
法小事

熱腎府番謀

所少法に執疑有降承仕に於て徳川家名を成り不見  
屋内を謝罪仕間爰是悟より存て間て然所少法其れ  
いひと

陪臣

松平肥後守

熱腎府番謀存中

○

頃日我社中又新聞と投與する者比々相屬と是を以て  
未だ稿を脱せざるの半筐又及る校合出来次第印  
刷い多し得共前後時日の相違多分可有之看官の  
着意参照せむことと我希望を

中津侯歎願書 仁和寺宮上書諸方の法届書等逐次記

載まぬ

相州小田原武州八王子邊に浪士屯集の報告あり  
大君御辭職以來の事を知らんと欲せむ追々發見する  
所の前記を見るに京師當時の職任の別集に詳あり



一社友新局を開き日々新聞と號し第一號より引續き  
出板を珍説定めて多かる所

中興... 齊... 仰... 志... 山...

和漢藥種所  
香貝唐線香  
繪之貝漆草  
元飯田町  
富嘉家宗輔

